

## 本多静六博士～日本の緑を育てた埼玉の偉人～

### 第1話 本多静六はどんなひと？

本多静六博士の主な業績とその生い立ちについてお話します。

本多静六は江戸時代末期の慶応2年（1866）現在の埼玉県久喜市に生まれました。

明治32年（1899）日本で初めて林学博士の学位を取得し、東京帝国大学農学部の教授として、明治・大正・昭和時代にかけて、日本を代表する林学の専門家として活躍しました。

また、日本の造園学の基礎を築いたことでも知られており、全国各地の公園の設計を手がけ、国立公園の創設にも尽力したことから、「日本の公園の父」と呼ばれています。

この他、本多静六は、自身で考案した儉約と貯金法を生活の中で実践し、莫大な富を築いた資産家である一方、それらの貯蓄を育英事業などで惜しみなく社会へ還元した社会活動家・慈善活動家でもありました。

そして、昭和27年（1952）85歳で亡くなるまで、生涯を通じて360冊あまりの著書を著しました。その中には、自身の経験に基づいた処世訓を数多くのこしたことで知られております。



本多静六博士

このように、本多静六は、多方面で活躍し、様々な業績を遺しましたが、その詳細については、次回以降の動画でお話ししたいと思います。

それでは次に、本多静六博士が、林学博士になるまでの生き立ちについて、お話しします。



本多静六の生家(昭和18年頃)

本多静六は、江戸時代末期の慶応2年(1866)現在の久喜市菖蒲町河原井にあたる、武蔵国埼玉郡河原井村の折原家の六男として生まれました。

村役人を勤める裕福な農家に生まれ育った静六は、人一倍負けず嫌いで、身体が丈夫で、ガキ大将として活発な幼少期を過ごしました。

静六が6歳のころ、地元の河原井学校に入学し、読み書きを習い始めますが、勉強嫌いのため、学校の境内や本堂を遊び場に使っていたといえます。

そんな静六に転機が訪れたのが9歳の時でした。

父が急死したことにより、一家の生活は困窮して厳しくなり、学校のかたわら、家業の農作業を手伝うようになりました。



河原井学校の門札(本多静六記念館)

家庭が困窮したことで、かえって静六は学問が好きになり、学問で偉い人になろうと思うようになったといいます。

14歳になった静六は、家族の反対にあいながらも上京し、元岩槻藩士で、大蔵省の役人だった島村泰の書生となりました。家庭の困窮状況もあり、春から秋にかけての農繁期には実家に帰って農作業の手伝いをしながら、わずかな時間をみつけて勉強に励む日々を送りました。

明治17年（1884）17歳の静六は、島村先生のすすめと家族から理解を得られたことにより、東京山林学校に入学します。

東京山林学校は後に東京帝国大学農科大学となり、現在の東京大学農学部の前身にあたる学校です。

この東京山林学校で、静六は林学を本格的に学ぶことになり、卒業後は、母校の助教授、そして教授となって、林学の研究と後進の指導にあたることになります。

静六が東京山林学校を選んだのは、新しい学問への興味と学費の安さで、それが偶然にも山林学校だったのだと後に語っています。



学生時代の本多静六

こうして、東京山林学校に入学した静六でしたが、成績はほぼ最下位で、一学期の期末試験では落第

してしまいました。静六の周囲の同級生は、皆中学校や師範学校を卒業した学生ばかりで、遅れをとってしまったのです。

そして、成績不振と落第を苦に、島村先生や家族に対して申し訳が立たないと、静六は井戸に身投げしました。しかし、幸いにして、井戸の途中で身体が引っ掛かり、一命をとりとめたといえます。

この後、静六は、島村先生に落第を不問にされたことで、生きる希望を取り戻し、改めて勉強に集中して、1年後には首席となるまで成績が上がりました。

明治22年（1889）22歳の静六は、江戸幕府の旗本だった本多晋の子銓子と結婚し、本多家の婿養子となり、名字を本多に改めました。

静六は、林学を学んでいくなかで、西洋の先進的な林学を学ぶため留学したいと考えていました。

本多家との縁談の際、留学費用の支援を約束されたことから、明治23年（1890）23歳の静六は東京帝国大学農科大学を首席で卒業すると、ドイツへ留学することになりました。



養父 本多晋



妻 本多銓子

ドイツへ渡った静六は、ドイツザクセン州ターラントの山林学校で5か月間林学を学んだ後、学位取得のため、首都のミュンヘン大学に移ります。

ミュンヘン大学では、4年間をかけて学位を取得して卒業するつもりだった静六に、思いもかけない



ドイツのターラント山林学校

知らせが日本から届きます。

それは、本多家がお金を預けていた銀行が倒産し、今後静六への学費の仕送りができなくなるというものでした。

手元にあるお金をどんなにきりつめても2年分の学費しか支払えない状況にあった静六は、2年間で学位を取得して卒業しようと決心し、猛勉強に励みました。そして、わずか2年間で学位を取得することに成功したのでした。

静六は、ドイツで、森林や造林の効用が木材生産だけでなく、保安、風致などの面でも人間に利益をもたらすことや、林業が国の財政に深く係ることを学びました。

明治26年（1893）日本に帰国した静六は、26歳で母校の東京帝国大学農科大学の助教授となり、2年間のドイツ留学で学んだ成果が、その後の研究や事業で発揮されることとなります。

そして、明治32年（1899）静六は32歳で日本初の林学博士の学位を取得することになるのでした。



ドイツ留学時代の本多静六